

# モノグラフ

中学生の世界

## 目次

vol. 9

1981. 教育図書出版(株)福武書店 教育・情報センター/加藤智禧・雨宮紀子・木村美紀子  
千葉大学助教授 明石要一

### 中学生の意識 生徒がみた中学教師

調査を実施して	2
調査目的	3
本報告書の要約	4
<b>第I章 生徒からみた教師の姿</b>	
●授業に熱心な教師	6
●家庭でも授業の下調べをする教師	8
●教師の中学時代は普通の中学生	9
●教師の潜在的能力は低いと評価する生徒	11
●教師と生徒の間で評価にかなりのズレ	13
<b>第II章 教師と生徒の間</b>	
●生徒の身なりや下校時間を特に注意する教師	15
●生徒のことをあまり知らない教師	16
●生徒を理解する努力が足りない教師	18
●教師には満足していない生徒たち	19
●「校内暴力」は教師の責任	20
<b>第III章 魅力ある教師とは</b>	
●人気があるのはユーモアのある教師	23
●気に入った教師がいる生徒85%	28
●気に入った教師にはニックネームをつける	30
●気に入った教師の授業は熱心にきき ノートをていねいにとる	32
●「勉強」や「進路」のことは頼りになる教師	35
<b>第IV章 『意味ある他者』としての教師</b>	
●生徒は、期待されると教師を高く評価し成績も上がる	38
●教師に期待されている生徒は、学校生活にも満足	40
●教師の仕事は大変だが大切なもの	42
まとめ	44
付 調査票見本	46

## 調査を実施して

『モノグラフ・中学生の世界 vol. 7—中学教師の生活と意見—』では、教師自身を対象にした調査研究を実施した。そこでは主に彼らの教職観や生活観に焦点を据えて考察し、次のような結果を見いだしている。「教師たちは、教職の現状をセミ専門職と考え、専門職化を強く望んでいた。しかし、そのための方向性を見いだせないでいる。特に、多くの教師は、教材研究や授業への取り組みに自信を持っているが、生徒への理解に欠ける印象を受けた。このギャップをうめることが、教職が専門職化するために不可欠と考えられる。」

そこで、今回は中学生を対象にして、彼らが日々教わっている教師たちをどのように評価しているのか、を明らかにしようとした。いくなれば、本調査は vol. 7 の姉妹編ということになる。教師自身は教材研究の取り組みや授業には自信を持っているが、生徒の理解はもう一步というように自信と不安の間に揺れ動いているらしい。生徒から見るとこうした教師の姿がどのように映り、それが彼らの中学生活にどのような影響を及ぼしているのか、を明らかにしようとした。したがって、本書を vol. 7 と併せてお読みいただくと幸いである。

調査票は、巻末に付した通りだが、実施と刊行にあたってはいつものように福武書店の全面的なご協力を得た。とくに福武書店社長・福武哲彦氏、福武教育・情報センターの加藤智禧氏・雨宮紀子氏・木村美紀子氏など、関係者の方がたに、厚くお礼を申しあげたい。

また、教師自身の調査ほどではないが、教師に関する調査はなかなか実施しにくいものである。こうした状況の中で調査実施にご協力をいただいた多くの中学校の先生方と、中学生のみなさんにも、改めてお礼を申しあげたい。

昭和56年9月

千葉大学助教授 明石 要一

## 調査目的

昭和56年3月、かなりの中学校が、警官に守られて卒業式を行ったという。こうしたニュースを耳にすると驚くと同時に胸がいたむ。自我形成の途上にある中学生にとって、教師の持つ重みはいうまでもない。

しかし、「校内暴力」をきっかけにして教師のあり方が問われはじめている。ある者は教師の怠慢を嘆き、ある者は教師の非力を訴える。さらに教師集団のまとまりのなさを指摘する者もいる。こうして教師の影響力の低下が大きな社会の関心事となっている。

「恩師」とか「仰げば尊し」などのコトバを出すのがはばかれるほどでもある。今や「心に残る教師」を期待するのは、ないものねだりの感がする。

はたしてそうであろうか。生徒にとって教師の影響はうすくなったのであろうか。日々子どもの輝かしい未来を願いつつ、教育活動に励む教師は少なくないだろう。ある教師は今でも生徒の自我形成に足跡を残しているのではなかろうか。すなわち、**教師は生徒にとって「意味ある他者」(significant others)となっているのではなかろうか。**

本調査はこのことを明らかにしようとしている。そのために生徒に焦点を据えて、彼らの抱く教師像を探る。

サンプルは、東京、千葉、山梨にある6つの中学校の1、2、3年生、男子1,016名、女子927名、計1,943名であった。調査の実施は昭和56年6月で、学校経由のアンケート調査が行われた。なお、調査票は巻末に掲げてある。

# 本報告書の要約

## ① 調査テーマ

自我形成の途上にいる中学生にとって教師の持つ重みはいうまでもない。「校内暴力」の問題をきっかけにして、教師の非力や姿勢が問われている。はたして教師は中学生にとって「意味ある他者」——自我形成に大きな影響を及ぼす者——たりえないのであろうか。

これが本報告書のテーマである。

## ② 調査対象

調査対象は、東京、千葉、山梨にある6つの中学校の1、2、3年生、男子1,016名、女子927名、計1,943名である。昭和56年6月に学校経由のアンケート調査が行われた。

## ③ 教材研究や授業に熱心な教師

学校の中には、家庭で下調べをし授業を熱心に教えている教師はかなりいる。しかし、豊かな教養を持ち親身になってくれる人間味のある教師は少ない。

(P.7 表1)

## ④ 教師の中学時代は普通の中学生

教師は子ども時代とりたててすぐれた才能を持っていなかった。大学卒業後、大企業に定年まで勤めたとしても、かなりの生徒が「課長どまり」(57.6%)とみる。

(P.10 表3、P.11 表4、P.12 図2)

## ⑤ 教師と生徒の間で評価にズレがある

教師は、自分は生徒から教材研究もし、授業も熱心、そして人間味のある教師とみられている、と思っている。ところが生徒は授業に熱心な教師はかなりいるが、人間味のある教師は少ないと思っている。

(P.13 表5、P.14 図3)

## ⑥ 生徒のことをあまり知らない教師

教師が生徒のことで知っているのはせいぜい「家族の人数」ぐらい。そして生徒理解のために人気マンガやラジオの深夜放送を聞こうとしていない、と思っている。

(P.16 表7、P.17 表8)

## ⑦ 友だち関係やクラブ活動には満足している生徒

教師のめんどろみのよさや教え方には満足していないが、友だちづきあいやクラブ活動にはある程度満足している。

(P.19 表9)

## ⑧ 「校内暴力」の原因を教師の人間味のなさに求める生徒

校内暴力の原因を「家庭のしつけ」や「本人自身」「友だち」よりも「教師」に求める。しかもそれは教授能力の低さでなく、人間味のなさと思っている。(P.21 表10)

**⑨ ユーモアがあり人間味のある  
教師に人気がある**

授業がわかりやすくノートをみしてくれる教師よりも、ユーモアがあり公平で親身になってくれる人間味のある教師に人気がある。(P.24 表12)

**⑩ 学校の中に気に入った教師が  
いる生徒85%**

気に入った教師と人気のある教師と重なる面がある。やはり人間味のある教師が気に入る。またニックネームもついている。(P.28 表14)

**⑪ タレントや動物のニックネーム  
が多い**

ニックネームは身体的な特徴からつけられやすい。タレントや動物などの名前を拝借している。そして親しみをこめて呼ばれている。(P.31 図12)

**⑫ 気に入った教師の授業は熱心に  
聞きその教科が好きになる**

気に入った教師の授業は、ノートをていねいにとり授業も熱心に聞く。またその教科が好きになる。(P.32 表15、P.34 図15)

**⑬ 「勉強」と「将来の進路」に悩んだとき  
気に入った教師が頼りになる**

異性や家庭のトラブルで悩んだときは頼

りにならない。頼れるのは勉強と進路に悩んだときだけ。(P.35 図17)

**⑭ 気に入った教師からめをかけら  
れている生徒ほぼ7割**

気に入った教師から特にめをかけられている者は12.8%、少しめをかけられている者55.5%。(P.38 図20)

**⑮ 教師からめをかけられるとその  
教師は「意味ある他者」となる**

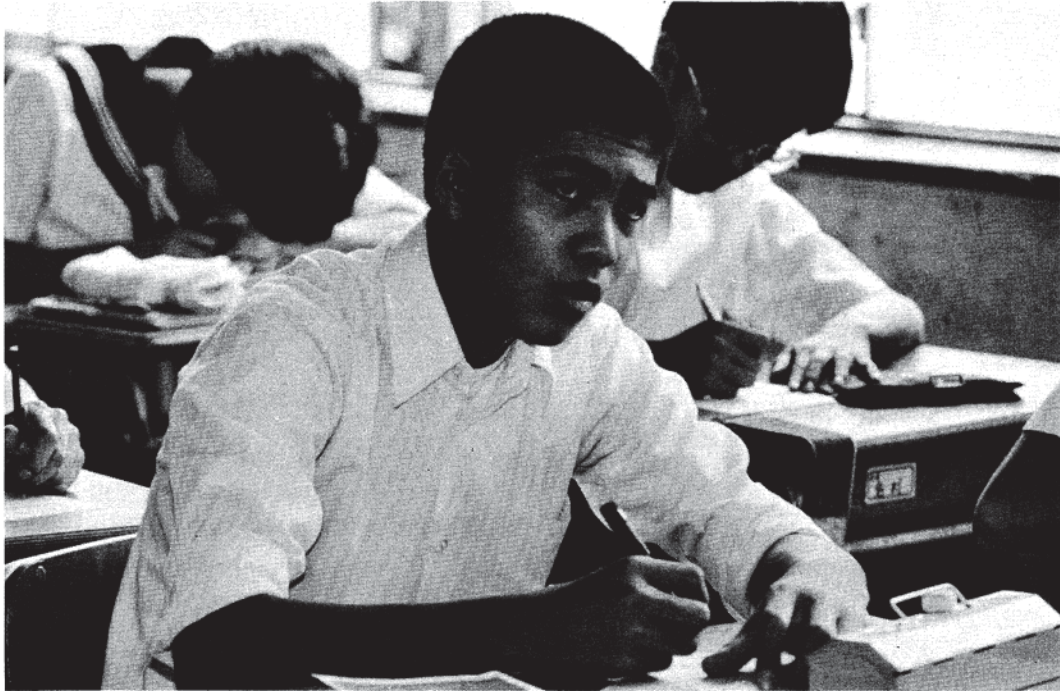
気に入った教師からめをかけられると一般教師の評価も高くなり、その先生の教える教科の成績もよくなる。さらに学校生活の満足度も高くなる。(P.38 表16、P.39 表17、P.40 表18・19)

**⑯ 「中学校教師」の仕事は大変だが  
大切である**

教師の仕事はのんきで気楽なものでない。気苦労が多いが社会的に尊敬され、やりがいのある仕事である、と生徒は評価する。(P.41 表20)

**⑰ 今後の課題**

学校の中に気に入った教師がいない生徒が15%ほどいる。彼らは教師に対してだけでなく学校生活すべてに満足していない。こうした生徒が気に入った教師を一人でも捜せるような対応がせまられる。



※写真は本文・テーマとはいっさい関係ありません

## ■第I章 生徒からみた教師の姿

### 授業に熱心な教師

現在、中学校の教師は約25万人いるといわれる。その中には、教育に熱意を持ち教材研究に精を出している教師や、クラブ活動の指導に熱心な教師もいるであろう。あるいは、勤務時間が過ぎると校門を後にして、塾や家庭教師のアルバイトに出かける教師もいるかもしれない。それこそさまざまな中学校の教師がいるだろう。

それでは、中学生は自分の学校にはどのような教師がいる、とみているのであろうか。それを調べたものが表1。これは、例えば「教え方がうまい」「ユーモアがある」のようなプラスイメージの教師がどれくらいいるのか、「とても多い」から「まったくない」まで

5段階で評定させている。

全体として、プラスイメージの教師はそれほど多くなく、半数ぐらしかいない。しかし、よくみると興味深い結果が読み取れる。「わりと多い」を加えた数値に注目すると、42.2%の「熱心に授業をしてくれる先生」を筆頭に、「専門についての知識のしっかりした先生」「教え方のうまい先生」それに「クラブの指導に熱心な先生」などのように**授業や生徒の指導に熱心な教師は、まあ多い**と思っている。

ところが、「個人的な悩みの相談にのってくれる先生」や「一人の人間としても尊敬できる先生」、「人間としての教養の豊かな先生」は、多くいないと思っている。

彼らは、自分の学校には「**人間的に尊敬で**

(表1) 生徒は学校の中にはどんな教師が多いと思っているか (%)

	とても 多い	わりと 多い	半分 ぐらい	わりと 少ない	まったく いない
熱心に授業をしてくれる先生	10.2 └★42.2┐	32.0	37.1	18.8 └20.7┐	1.9
専門についての知識のしっかりした先生	7.4 └32.9┐	25.5	★43.2	20.9 └23.9┐	3.0
教え方のうまい先生	5.7 └32.0┐	26.3	★41.3	24.3 └26.7┐	2.4
クラブの指導に熱心な先生	9.2 └32.1┐	22.9	★34.1	30.5 └33.8┐	3.3
教育についてしっかりした信念を持っている先生	7.1 └31.5┐	24.4	★41.1	23.8 └27.4┐	3.6
ユーモアのある先生	6.6 └31.5┐	24.9	33.0	32.4 └★35.5┐	3.1
人間としての教養の豊かな先生	5.4 └25.6┐	20.2	★43.0	26.6 └31.4┐	4.8
一人の人間としても尊敬できる先生	4.5 └19.4┐	14.9	27.5	41.5 └★53.1┐	11.6
生徒の個人的な悩みの相談にのってくれる先生	3.1 └17.4┐	14.3	31.9	37.9 └★50.7┐	12.8

★：最頻値

き、生徒のことを親身に考えてくれる人間味のある教師」は少ないとみる。しかし、「専門の知識はあり教え方もうまく、熱心な授業をする教師」はわりと多いとみている。

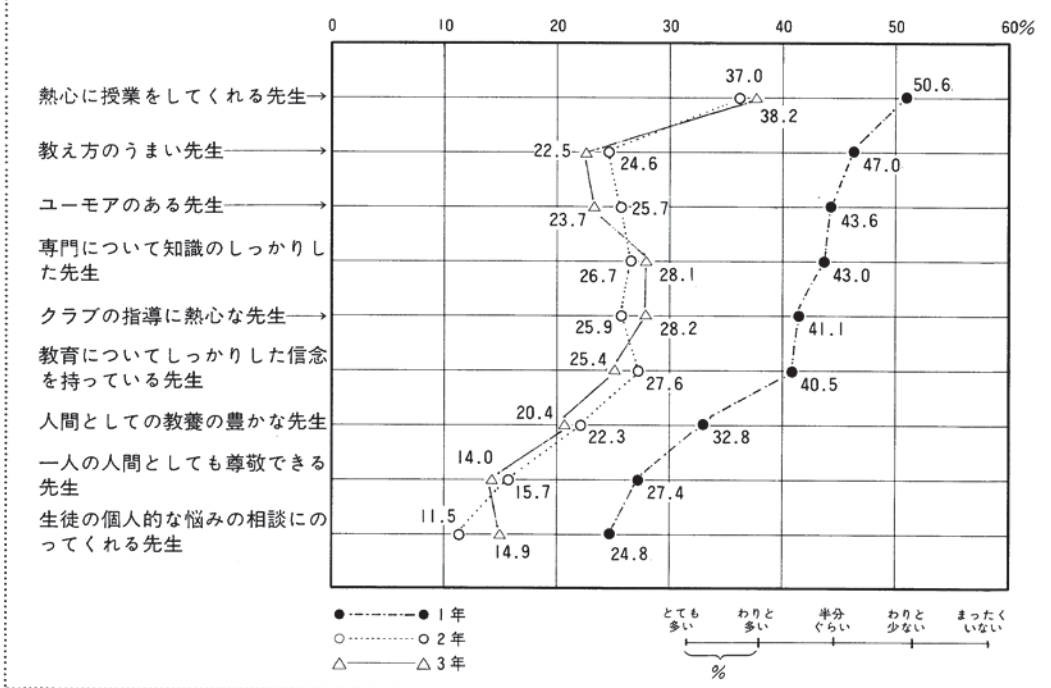
次に、図1は学校内での教師像を学年別に示した。図中の数値は「とても多い」「わりと多い」を加えてある。一覧すればおわかりのように、人間味のある教師は少なく、教え方がうまく授業に熱心な教師はかなり多い、という見方は学年を問わずみられる。

ところが、学年によって教師イメージに変化がみられる。つまり、1年生は自分の学校には2、3年生よりもプラスイメージの教師が多いとみている。今、「教え方のうまい先生」を例にとると、1年生47.0%、2年生24.6%、3年生22.5%となる。1年生の半数に

近い者は、教え方のうまい教師がかなりいると思っている。そして、こうした認知は、授業や教え方だけでなく、少ないとみられている人間的で親身になる教師に対するイメージにもあてはまる。

調査は6月に実施したので、1年生の中学校生活はわずか2か月間と短い。教師との接触の機会が乏しいからなのか、あるいは、中学校の教師に対して大きな期待を持っているのか、1年生はまだプラスイメージの教師が多くいると思っている。それが、2、3年生になるとともに、「熱心に授業を教えてくれる先生」を例外として、プラスイメージの教師の数を低く見積る。すなわち、それらの教師が多くいると思う者は、1～2割ほどである。ちなみに、表は割愛したが性別によって

〈図1〉 学年別にみた学校内の教師像



教師像に差はみられなかった。男女とも学校内の教師のイメージは同じようだ。

### 家庭でも授業の下調べをする教師

全体としてプラスイメージの教師は多くないが、授業に熱心な教師はかなりいるという生徒の評価であった。それでは、生徒は教師の余暇行動をどうみているのであろうか。直接生徒の目に触れない学校外での教師の暮らしをどのように想像しているのか。

表2は、「テレビのニュースをいつもみている先生」から「塾などに教えにいつている先生」までの7項目について「とても多い」から「まったくいない」までの5段階で評定

してもらったものを、数値の高い順に示してある。

家で「テレビのニュースをいつもみる先生」や「明日の授業の下調べをしている先生」は、「わりと多い」も加えると多くいると答える者が4割を越える。ところが、横になりのおびりと「人気番組のテレビをみる先生」や「マンガを読む先生」は、「わりと少ない」も加えて、6～7割の者が少ないと答えている。これら同様に、少ないとみられているのが、「書店でベストセラーの本を捜す先生」や「塾などに教えにいつている先生」である。

生徒は、ごろりと寝転んでマンガやテレビの人気番組をみながら余暇を楽しんだり、塾や家庭教師に励む、どちらかといえば不熱心な教師は少ない、と想像している。逆に、ニュー



(表2) 生徒からみた教師の余暇行動

(%)

	とても多い	わりと多い	半分ぐらい	わりと少ない	まったくいない
テレビのニュースをいつもみている先生	11.9 └─★46.6 ─┘	34.7	36.3	14.4 └─ 17.1 ─┘	2.7
明日の授業の下調べをしている先生	8.7 └─★41.9 ─┘	33.2	36.1	17.7 └─ 22.0 ─┘	4.3
横になり人気番組のテレビをみている先生	6.7 └─ 17.7 ─┘	11.0	21.7	41.5 └─★60.6 ─┘	19.1
なにもしなく、ごろりと寝転んでいる先生	7.8 └─ 16.3 ─┘	8.5	16.7	34.9 └─★67.0 ─┘	32.1
マンガを読んでいる先生	4.8 └─ 10.6 ─┘	5.8	14.2	39.0 └─★75.2 ─┘	36.2
書店にたちよりベストセラーの本を捜している先生	2.2 └─ 7.1 ─┘	4.9	22.5	46.6 └─★70.4 ─┘	23.8
塾や家庭教師となって教える先生	0.7 └─ 2.3 ─┘	1.6	8.0	30.6 └─★89.7 ─┘	59.1

★：最頻値

スをみたり、明日の授業の下調べをするマジメで熱心な教師はわりと多くとみている。

生徒にとって、学校内の教師の姿はともかく、校外での行動はみえにくい。しかし、彼らには、かなりの教師は帰宅後はのんびり過ごすのではなく、明日の授業の準備をしている、というようにマジメに映っている。このような教師の余暇行動は、性別や学年によって差はみられない。校外での教師の姿は、中学生の中では固まったイメージとして定着しているようだ。

中学生は自分たちの学校には一人の人間として尊敬できるような人間的な教師は少ない。しかし、かなりの教師は、専門的な知識を持っており、家でも授業の準備に精を出し、実際の授業も熱心に教えている。

こうした姿が生徒が描く平均的な教師像のようだ。

## 教師の中学時代は 普通の中学生

生徒が教師をどう評価しているのかを問題にすると、大人としての姿が対象となるのが普通であった。しかし、当然ながら教師にも中学時代がある。彼らは大人としての教師でなく、中学生のときはどんな生徒であったと想像しているのであろうか。特別な才能を持ち勉強のできた生徒だったのか、それともあまりめだたない普通の生徒だったのだろうか。

表3。これは教師の中学時代の「友だちの

(表3) 生徒からみた教師の中学時代の評価

(%)

	とても 高い評価	かなり 高い評価	やや 高い評価	ふつう ぐらい	やや 低い評価	かなり 低い評価	とても 低い評価
友だちの数	10.8 └─ 34.3 ─┘	23.5	25.3	29.2	4.2	1.8 └─ 7.0 ─┘	5.2
先生からの信頼	7.0 └─ 26.1 ─┘	19.1	25.8	32.6	6.6	3.1 └─ 8.9 ─┘	5.8
友だちをリードする力	5.7 └─ 21.5 ─┘	15.8	28.4	32.5	8.4	3.5 └─ 9.2 ─┘	5.7
学業成績	4.9 └─ 21.4 ─┘	16.5	28.1	28.2	11.9	4.0 └─ 10.4 ─┘	6.4

注) スケールはそれぞれの項目に対応したものを用意しておいた。  
巻末参照



数」「先生からの信頼」それに「友だちをリードする力」「学業成績」について、生徒に評定してもらった結果である。スケールは「とてもそうである」から「とてもそうでない」の7段階となっている。

どの項目とも「とてもそうであった」とみる数値は低い。もっとも高い数値の「友だちの数」でも1割である。これに「かなりそうである」を加えても、「友だちの数」34.3%、「先生からの信頼」26.1%、「友だちをリードする力」21.5%、「学業成績」21.4%と数値は依然として低い。全体としては、中学時代の教師は「ややすぐれていた」か「ふつうぐらい」の生徒だったとみられている。

すなわち、勉強がとりたててできたわけではなく、教師からの信頼も厚かったともいえない。そして多くの友人を持ち仲間の中でリーダーシップを発揮していたとも思っていない。教師が過去に「栄光の時代」を体験したとは

思わない。しかし、そうかといって陽の当たらない失意の中学時代を送ったとも思わない。普通の中学生か、さもなくばやや日の目をみた中学生というのが、生徒の抱く教師の昔の姿といえよう。

こうした教師に対する評価が、学年や性別によって変化するのだろうか。どの特性をみても、性差や学年差はあまりみられない。先ほど指摘したように、学校内での教師像では1年生が教師を好意的にみていた。ところが、あまり目に触れることの少ない教師の校外での行動や、この教師の中学時代の評価は、学年差がさほどみられない。どの学年の中学生も教師は自分と同じ頃、さほどきわだった生徒でなかったと思っている。すなわち、直接に体験できない教師のことは、男女の差はもとより、学年の差は生じなく、同じイメージに映っているようだ。

(表4) 生徒からみた教師の潜在的能力

(%)

	きつとなれる	たぶん なれる	半分 半分	たぶん なれない	ぜんぜん なれない
おいしいお米をつくるお百姓	25.8 └─ 46.9 ─┘	21.1	22.8	19.4 └─ 30.3 ─┘	10.9
親に評判のよい塾の経営者	12.6 └─ 34.0 ─┘	21.4	26.6	17.1 └─ 39.4 ─┘	22.3
その町で味に評判のよいラーメン屋	11.3 └─ 28.5 ─┘	17.2	26.1	24.7 └─ 45.4 ─┘	20.7
高校野球の監督	6.7 └─ 20.8 ─┘	14.1	20.9	25.7 └─ 58.3 ─┘	32.6
雑誌にのる小説を一編書ける作家	6.8 └─ 20.0 ─┘	13.2	22.4	25.5 └─ 57.6 ─┘	32.1
レコードを1曲ぐらいだせる歌手	3.7 └─ 8.9 ─┘	5.2	12.6	28.5 └─ 78.5 ─┘	50.0

## 教師の潜在的能力は低いと評価する生徒

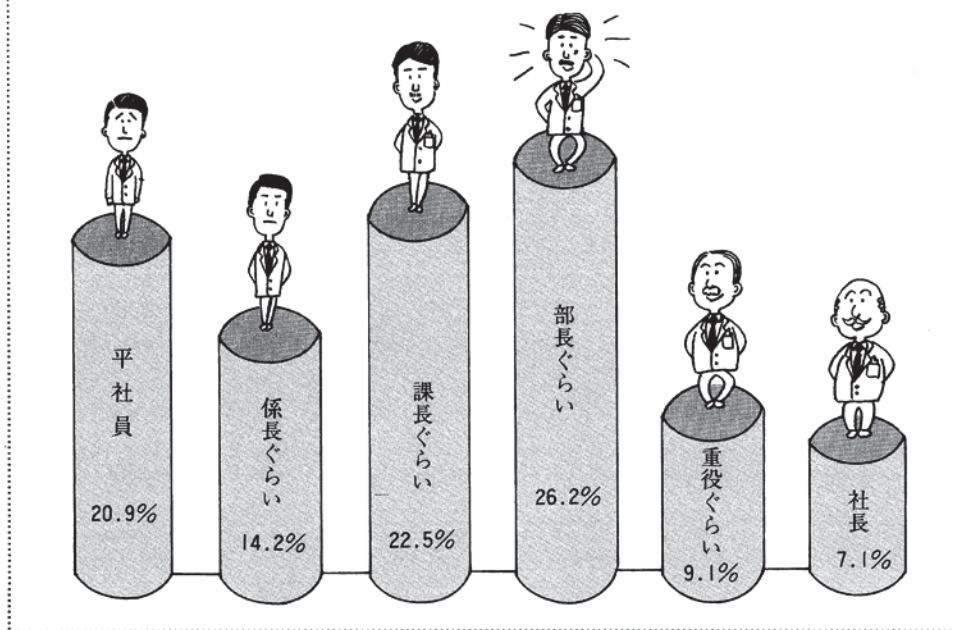
さて、中学生の頃これといった特徴のない普通の生徒だったとみられた教師は、もし教職でなく他の職業に就いたなら、どこまでやれると思われているのだろうか。尊い子どもの未来をあずかる教職は、当然ながらさまざまな資質と能力を要求される。それを生業とする教師の資質と能力を生徒はどのように評価しているのか。ここでは、男の教師を一人思い浮かべてもらい、その人が、かりに大学卒業後、教職以外の道を選んだときどこまでやれると思うか、という質問から教師の潜在的な力 (power) を調べている。教職以外の職業は、「おいしいお米をつくるお百姓」、「雑誌にのる小説を一編書ける作家」などの6種類をあげた。

結果は表4に示してある。スケールは「き

つとなれる」から「ぜんぜんなれない」までの5段階。表中の「きつとなれる」数値に注目してほしい。全体として、どの職業に就いてもうまくやれると思う者が少ない。一番高い数値の「おいしいお米をつくるお百姓」でも25.8%と4分の1程度。「レコードを一曲ぐらいだせる歌手」に至っては3.7%ときわめて少ない。もっとも歌手は特別な才能を必要とするので、考え方によってはこうした数値もうなずけるだろう。ところが、教職に近いとみられる「親に評判のよい塾の経営者」でも「きつとなれる」と思う者はわずか12.6%である。

次に、なれそうな程度を度外視して、「たぶんなれる」も加えてみる。そうすると、「おいしいお米をつくるお百姓」になれそうと思う者が、46.9%でやっと4割を越える。それ以外は、「評判のよい塾の経営者」で34.0%「高校野球の監督」や「作家」は2割ほどしかなれると思わない。「お百姓」以外の職業は

〈図2〉 生徒からみた教師の大企業定年までの到達地位の予想……



「なれない」と思う者のほうが多くなっている。

こうみえてくると、生徒たちの教師の潜在的な力 (power) についての評価はかなり厳しいものようだ。うまくやれば、「おいしいお米をつくるお百姓」にはなんとかなれそうだが、一番なれそうと思われる「塾の経営者」も危なく、「高校野球の監督」や「作家」に至っては無理と判断している。

これまで、具体的な職業を掲げて教師の資質と能力を評価してもらった。今度は少しアングルを変えて大学卒業後大企業に定年まで勤めたとき、どの地位まで到達できているかを調べてみた。地位のスケールは「平社員」から「社長」までの6段階にしてある。図2。一瞥すればおわかりのように、一番多いのは「部長ぐらい」であるが、それとして26.2%と4分の1。次が「課長ぐらい」

で22.5%、そして「平社員」の20.9%、「係長ぐらい」の14.2%と続く。

「社長」も含めて「重役ぐらい」まで到達できていると思っている生徒が16.2%もいることは無視できない。しかし、定年まで勤めて課長どまりとみている者はほぼ6割に近い。全体として、教師が大企業に定年まで勤めたとすると、よくて部長、せいぜい課長くらいだろう、と予測している。

中学生にとってある程度身近かで、しかも評価しやすいであろうと思われるサラリーマンを想定しても、教師の持っている資質と能力は、やはりそれほどあると思われていない。

また、表は割愛したが、教師の潜在的な力の評価で性差や学年差は、ほとんどみられなかった。ここでも生徒の教師イメージは固まっているようだ。

(表5) 教師は生徒からどのように評価されているか(教師自身の評価) (%)

	そう思われている			そう思われていない		
	とても	かなり	やや	やや	かなり	まったく
熱心に授業をする先生	6.7 └──	44.7 91.3	39.9 └──	6.7 └──	1.7 8.7	0.3 └──
専門についての知識のしっかりした先生	5.4 └──	34.8 84.4	44.2 └──	13.2 └──	1.7 15.6	0.7 └──
教え方のうまい先生	1.7 └──	29.3 76.8	45.8 └──	17.5 └──	5.4 23.2	0.3 └──
クラブの指導に熱心な先生	6.1 └──	17.2 54.2	30.9 └──	26.3 └──	13.1 45.8	6.4 └──
教育についてしっかりした信念を持っている先生	8.8 └──	30.3 79.2	40.1 └──	17.8 └──	2.7 20.8	0.3 └──
ユーモアのある先生	4.0 └──	25.1 66.3	37.2 └──	26.4 └──	6.0 33.7	1.3 └──
人間としての教養の豊かな先生	2.0 └──	21.5 75.4	51.9 └──	19.2 └──	4.7 24.6	0.7 └──
一人の人間としても尊敬できる先生	2.4 └──	22.9 72.4	47.1 └──	21.5 └──	2.7 27.6	3.4 └──
生徒の個人的な悩みの相談にのってくれる先生	6.0 └──	22.5 76.5	48.0 └──	15.8 └──	6.4 23.5	1.3 └──

資料出典：『モノグラフ・中学生の世界 vol. 7』

## 教師と生徒の間で評価に かなりのズレ

今までは、生徒が教師をどうみているのかについて論じてきた。ここでは、教師自身が生徒からどう評価されているか、そして自分たちの子ども時代をどうみているのか、を明らかにしたい。そうすることによって、教師と生徒の間のズレがはっきりしてくるだろう。

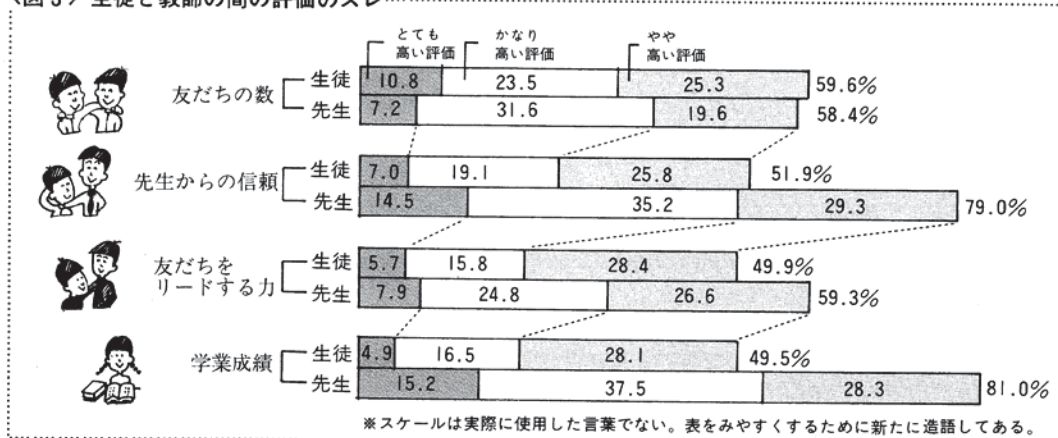
まず、教師は生徒からどのように評価されているか、と思っているのだろうか。表5。これは、『モノグラフ・中学生の世界 vol. 7—中学教師の生活と意見—』のデータである。

したがって、生徒たちが直接に接触している教師の意見ではない。しかし、教師を対象とした調査がなかなかできにくく、データの乏しい状況を考えるとこれは貴重な資料となる。

このような制約を念頭におきつつ、結果を読み取っていく。スケールは「とても思われている」から「まったく思われていない」の6段階であったが、見やすくするために数値は「そう思われている」と「思われていない」の二つにリコードしてある。

全体として、教師は生徒から好意的に評価されていると思っている。今、数値が7割を越えるものだけを拾ってみると、自分たちは専門の知識を持ち、教え方がうまく、授業も熱

〈図3〉 生徒と教師の間の評価のズレ



心で、そして教育についてしっかりした信念を持ち、教養もあり、生徒の悩みにもものってあげ、一人の人間として尊敬されている教師ということになる。

これは、生徒からの評価の強さを度外視した場合である。それにしても、教師はあまりにも身勝手に楽天過ぎはしないだろうか。先に述べたように、生徒は授業に熱心な教師はかなりいるとみていた。それを考えると、多くの教師が、授業にかかわる側面で生徒から高く評価されていると思うことは、ある程度理解できよう。

しかし、人間的に尊敬でき、自分たちのことを親身に考えてくれる人間味のある教師に対する評価では、教師と生徒の間に大きな溝がある。生徒は人間味のある教師は少ないと思っているのに対して、教師自身は生徒から人間味のある教師とみられている、と思っている。

こうした教師のヒューマン（人間味）に関する両者の認知のズレに、今日の中学校で生じている問題発生の一端がうかがえる。

また、生徒と教師の認知のズレは、現実の教師イメージにとどまらない。それは、教師

の子ども時代の評価にもうかがえる。図3に注目してほしい。

教師は子どもの頃、自分たちは「学業成績」（81.0%）がよく、「先生からの信頼」（79.0%）も厚かったと思っている。そして、「友だちの数」（58.4%）もかなり多く、「友だちをリードする力」（59.3%）もある程度持っていたと回想する。

他方、生徒は教師の子ども時代を「友だちの数」については、ほとんど同じに評価する。ところが、とりわけ「学業成績」（49.5%）や「先生からの信頼」（51.9%）に至っては教師ほど高くない。両方とも30%のひらきがある。

教師は、自分たちは子どもの頃勉強もでき先生からも信頼され、友人との関係もうまくいっていた、という思い出を持つ。そして、教職に就いてからも、授業だけでなくヒューマンな面までも生徒から好意的に受け取られている、と思っている。

ところが、生徒は教師の子ども時代を教師ほどに高くみない。そして、現実の姿では授業は熱心だが、悩みの相談にのってくれなく人間的にも尊敬できない、と描いている。両者の間にはかなりのズレが生じている。



※写真は本文とはいっさい関係ありません

## ■ 第二章

## 教師と生徒の間

### 生徒の身なりや 下校時間を特に注意する教師

子どもの尊い未来をあずかる教師は、日々彼らの成長を願いつつ教壇に立ったり、運動場を一緒に走りまわる。そこにおいては、当然のことながら教師から生徒に対して一定の方向づけがある。ここでは、こうした教師の生徒への働きかけを取り上げる。

まず、教師たちは生徒の生活にどれぐらい関心を持っているのであろうか。表6は「服装や髪形などの身なり」から「異性との交際」までの7項目について、生徒からみた教師の関心度を示してある。スケールは「とても注意する」から「まったく注意しない」の5段階である。

教師が生徒の生活でもっとも関心を持ち注意しているものは、彼らの服装や髪形などの身なりのようだ。教師が「とても注意する」と答えた者が41.2%、それに「わりと注意する」を加えると7割を越える。次が「下校する時間」。「わりと」を加えて6割の生徒が教師は下校時間を注意していると答えている。

それから、生徒の家庭学習や言葉づかいにもまあ関心を持ち注意しているものの、「異性との交際」(8.9%)や「テレビの視聴時間」(17.4%)それに「放課後や日曜日に遊びに行く場所」(28.7%)などには、あまり目を向けていない。

学校機能の縮小論もあるように、教師が生徒の生活すべてに関心を向け、注意する必要はなかろう。かりにそうしたことの必要性を

(表6) 生徒からみた教師の生徒への関心度

	とても注意する	わりと注意する	半分半分	わりと注意しない	まったく注意しない
服装や髪形などの身なりについて	41.2 └ 72.3 ┘	31.1	16.5	8.8 └ 11.2 ┘	2.4
下校する時間について	21.6 └ 59.7 ┘	38.1	24.6	12.4 └ 15.7 ┘	3.3
家での勉強時間について	10.2 └ 40.7 ┘	30.5	34.3	18.8 └ 25.0 ┘	6.2
生徒の言葉づかいについて	7.8 └ 37.7 ┘	29.9	35.1	23.1 └ 27.2 ┘	4.1
放課後や日曜日に遊びに行く場所について	8.4 └ 28.7 ┘	20.3	25.6	29.6 └ 45.7 ┘	16.1
テレビの視聴時間について	2.6 └ 17.4 ┘	14.8	28.6	35.6 └ 54.0 ┘	18.4
異性との交際について	3.1 └ 8.9 ┘	5.8	26.2	29.3 └ 64.9 ┘	35.6

(表7) 生徒は担任が自分のことをどれくらい知っていると思っているか

	とても知っている	かなり知っている	半分半分	あまり知らない	まったく知らない
あなたの家族の人数	19.5 └ 39.9 ┘	20.4	28.1	20.5 └ 32.0 ┘	11.5
あなたの得意、不得意な科目のこと	6.7 └ 27.5 ┘	20.8	38.1	26.3 └ 34.4 ┘	8.1
放課後、どのような道順で下校しているのか	7.2 └ 20.7 ┘	13.5	24.6	30.5 └ 54.7 ┘	24.2
家での勉強時間	5.5 └ 17.3 ┘	11.8	29.3	32.1 └ 53.4 ┘	21.3
本当に進みたい高校のこと	3.2 └ 11.5 ┘	8.3	21.8	29.5 └ 66.7 ┘	37.2
将来つきたいと思っている職業	2.8 └ 8.7 ┘	5.9	16.9	32.2 └ 74.4 ┘	42.2
あなたがよくみているテレビ番組	2.0 └ 4.7 ┘	2.7	10.3	29.1 └ 85.0 ┘	55.9
好きな異性がいるかいないか	2.1 └ 4.6 ┘	2.5	14.7	23.5 └ 80.7 ┘	57.2
今一番ほしいと思っているもの	1.6 └ 3.5 ┘	1.9	11.6	26.7 └ 84.9 ┘	58.2

認めたととしても、現実にはそこまで手がまわらなく無理である。

とはいうものの、教師がとりわけ関心を向けているのが、生徒の身なりや下校の時間などの目の届きやすい事柄というのも、いかにも便宜的だし、管理的なような気がする。自我を形成する途上にいる中学生にとって、彼らの言葉づかいやテレビ視聴のあり方についても、もっと目を注ぐ必要があるだろう。

### 生徒のことを あまり知らない教師

教師が生徒を一定の方向に導こうとすると、彼らの実態を把握しておくのは当たり前であろう。それでは、教師は生徒のことをどれだけ知っているのでしょうか。

この問題は、調査の中では「先生はあなたのことをどれだけ知っていると思いますか、



(表8) 生徒からみた教師の生徒理解への努力

(%)

	とてもそう している	まあそう している	半分 半分	あまりそう していない	まったくそう していない
クラブ活動を一緒にやる	13.8 └──41.5──┘	27.7	32.2	18.2 └──26.3──┘	8.1
掃除をみんなと一緒にやる	14.5 └──35.5──┘	21.0	24.2	19.6 └──40.3──┘	20.7
朝、生徒が登校する前に学校へ来る	9.2 └──26.9──┘	17.7	30.0	28.5 └──43.1──┘	14.6
生徒の顔色がよいか悪いか注目する	8.0 └──26.3──┘	18.3	33.0	24.2 └──40.7──┘	16.5
「金八先生」「熱中時代」などのテレビをかかさずみている	5.1 └──15.8──┘	10.7	30.2	32.8 └──54.0──┘	21.2
生徒に人気のあるマンガを読む	2.4 └──7.0──┘	4.6	16.0	41.6 └──77.0──┘	35.4
昼休み、教室に残るようにしている	1.4 └──6.3──┘	4.9	18.8	39.1 └──74.9──┘	35.8
ラジオの深夜放送を聞いている	1.9 └──5.7──┘	3.8	19.3	42.1 └──75.0──┘	32.9

とたずねた。また、先生といっても生徒個人にとってはさまざまな人が浮かぶだろうから、担任の教師に限定してある。

表7は、生徒が担任の教師からどれくらい知られているかを、「あなたの家族の人数」から「今一番ほしいと思っているもの」という9項目にわたって記入させた結果である。

まず全体に生徒は担任からあまり知られていない、と思っていることがわかる。もっとも知られている家族の人数で、「かなり」を含めて4割。次が、「得意あるいは不得意な科目」で27.5%。「将来つきたいと思っている職業」(8.7%)や「好きな異性がいるかいないか」(4.6%)、それに「今一番ほしいと思っているもの」(3.5%)などに至っては、1割をわる。

次に知られてないうちでも、家族の人数や得意、不得意な科目というそれほど労を要しないことは、知られているほうだ。しかし、本当に進みたい高校や今一番ほしいと思っているものという、生徒の胸に秘められたものはほとんど知らない。

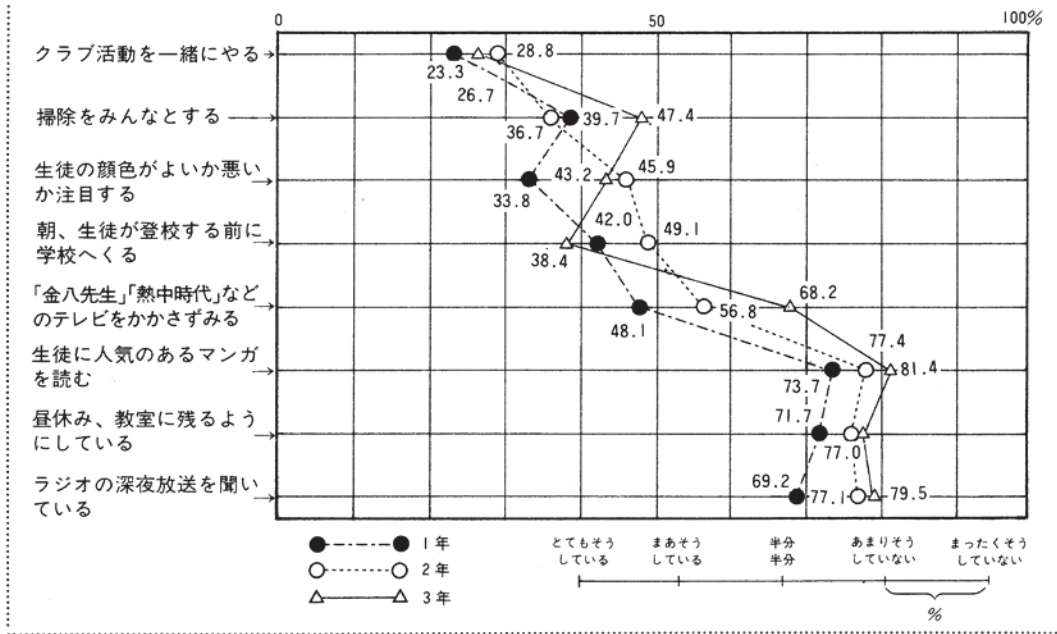
調査の実施が6月だったので、担任と生徒の接触期間は2か月ほどである。確かに、こ

の期間は短いといえるかも知れない。けれども、1日でクラスの生徒の名前と顔を覚えたという教師もいる。それに、ここに掲げた事柄は生徒理解の基本的なものばかりである。これらの多くのものは、1学期の間にある程度知っておく必要があるだろう。そのように考えると、教師はやはり生徒の姿をあまりにも知らな過ぎるようだ。

ところで、こうした教師の生徒理解への評価は学年によって変化するのだろうか。ほとんどの事柄は、学年による差がみられない。ただし、得意、不得意の科目や身近かな進路は、それぞれ22.3%(中1)→28.0%(中2)→32.9%(中3)、5.7%→7.2%→22.4%と学年とともに、知られているものが増える。

3年生になると高校進学が目の前にせまり、進路調査を行うところもでてくる。進路相談の中では当たり前だが、本人の得意、不得意な科目が問題にされる。したがって、3年生になるほどこうした事柄が、教師に知られるのはうなずける。このほか、生徒の学業成績や性別との関係も検討したが、ほとんど有意の差がみられなかった。

〈図4〉 生徒からみた教師の生徒理解の努力の低さ(学年別)



### 生徒を理解する努力が 足りない教師

教師は自分の心の内を知らないというのが生徒たちの声であった。それでは、自分たちを理解しようと教師はどんな努力をしていると映っているのだろうか。

それを調べたものが前ページ表8に掲げられている。全体として生徒は、教師は自分たちを理解しようとする行動をとっていない、とみている。どちらかといえば、努力しているのはクラブ活動の指導で、「まあ」も含めて41.5%。人気のある「金八先生」や「熱中時代」のテレビ(15.8%)をみたり、マンガ(7.0%)を読んだり、ラジオの深夜放送(5.7%)に耳をかたむける努力は乏しい。

生徒と一緒に活動をしようとはするが、生徒の間で人気のある番組やマンガなどを通し

て、彼らの心情をわかろうとする努力が足りない。ここから、「先生は本当は何もわかっていない」という生徒の声が聞こえてきそうだ。

また、こうした声は学年が進むにつれて大きくなる。図4に学年別にみた教師の熱意の足りなさを掲げてある。数値は「あまりしていない」「まったくしていない」を加えてある。

全体的に多くの項目で、学年とともに教師は生徒理解への努力をしていない、とみるようになる。例えば「生徒に人気のあるマンガ」は73.7%(中1)→77.4%(中2)→81.4%(中3)と読まなくなるし、「ラジオの深夜放送」も69.2%(中1)→77.1%(中2)→79.5%(中3)と聞かなくなる。そして、生徒一人一人の様子を知ろうとして昼休み教室に残ろうともしなくなる71.7%(中1)→77.0%(中2)→77.9%(中3)。

(表9) 学校生活の満足度

(%)

	とても満足している	かなり満足している	半分半分	あまり満足していない	まったく満足していない
友だちとのつきあい	18.7 └ 50.6 ┘	31.9	36.1	9.8 └ 13.3 ┘	3.5
クラブ活動の活発さ	12.0 └ 35.6 ┘	23.6	39.9	18.6 └ 24.5 ┘	5.9
運動会や文化祭のあり方	8.9 └ 33.0 ┘	24.1	42.9	15.7 └ 24.1 ┘	8.4
先生の教え方	4.7 └ 27.7 ┘	23.0	52.2	15.6 └ 20.1 ┘	4.5
先生方のめんどうみのよさ	5.5 └ 21.9 ┘	16.4	50.7	18.0 └ 27.4 ┘	9.4



したがって、生徒にすれば教師は自分たちの胸の内をほとんど知らなく、知ろうとする努力を怠っている。そして、実際の生徒指導は、教師の目につきやすい髪形や服装という身なりや下校時間にとどまっている、と映る。

### 教師には満足していない生徒たち

中学生にとって、教師とのかかわりが学校生活のすべてではない。そこには、友人との接触はもとより、学校行事やクラブ活動への参加もある。生徒は学校生活にどれくらい満足しているのだろうか。また、さまざまある学校の生活の中で、教師との関係はどんな位置を占めるのであろうか。

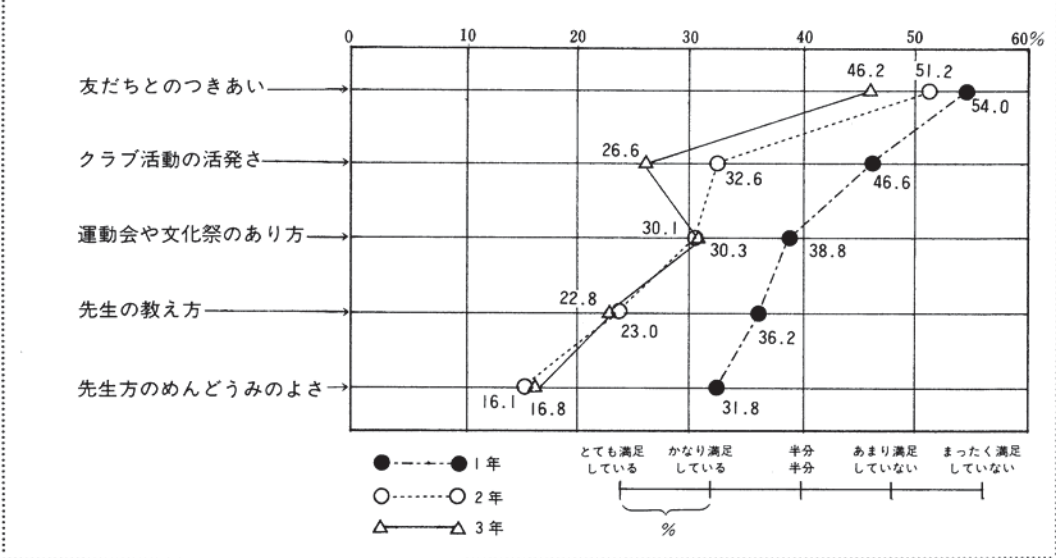
それを検討したのが表9である。「友だちとのつきあい」に満足している(「かなり」も含

めて)者は半数いる。それから、「クラブ活動の活発さ」(35.6%)や「運動会や文化祭のあり方」(33.0%)に満足する者は、3割強となっている。

ところが、「先生の教え方」に満足している者は27.7%と3割をわる。そして、「先生のめんどうみのよさ」になると、さらに減り2割ほどになる。

全体として中学生は友人との接触にはまあ満足しているようだ。しかし、教師のあり方には満足していない。教師のめんどうみのよさに対する満足の少なさは、今までの記述からある程度予測はできた。ところが、生徒は教師は授業の下調べはしているし、授業もかなり熱心に教えてくれているとみていた。この教師の教え方についての低い満足度は、教師が生徒の実態をあまり踏まえなく、一方的な授業をしているためなのではなかろうか。

〈図5〉 学校生活の満足度(学年別)



教師の授業の熱心さは認めるが、もうひとついねいにわかりやすく教えてほしいものだ、という生徒たちの声が聞こえてくる。次に図5に目を移してほしい。学校生活の満足度を学年別に調べてみた。数値は「とても満足している」「かなり満足している」を加えてある。

どの項目とも学年が進むにつれて満足度が減る。とりわけ1年生から2年生にかけての低下が著しい。1年生はまだ中学生活に希望を抱いているのだろうか、「友だちとのつきあい」(54.0%)や「クラブ活動の活発さ」(46.6%)には、かなりの者が満足している。同じことが、満足度の低かった「先生の教え方」や「めんどうみのよさ」についてもいえる。

しかし、こうした満足度も2年生を境に低下する。その典型が「先生のめんどうみのよさ」

31.8%(中1)→16.1%(中2)→16.8%(中3)にみられる。同じ中学生でも学年差があり、大きな断層は1年と2、3年の間にある、という中学校教師の声を聞く。こうしたことが学校生活の満足度に典型的に現れているようだ。

### 「校内暴力」は教師の責任

今日中学生の教師観を論じようとしたとき、避けて通れないのが「校内暴力」の問題であろう。ここで改めていうまでもなく、この問題は教師はもとより、子どものすこやかな成長を願う者の胸をいためる。

校内暴力は、今日始めて生じた出来事ではない。今までにも例えば、卒業時の「お礼参り」という形をとりながら、生徒同士や教師に対する暴力行為はあった。しかし、それ

(表10) 生徒からみた「校内暴力の原因」

(%)

		とても そう思う	まあ そう思う	どちら でもない	あまり そう 思わない	ぜんぜん そう 思わない
教師	「校内暴力」が起きるのは、先生が一部の生徒だけをひいきにするからだ	31.9 └─73.4─┘	41.5	15.9	7.0 └─10.7─┘	3.7
	「校内暴力」が起きるのは、授業をできる生徒を中心にすすめるからだ	28.7 └─69.4─┘	40.7	17.1	9.4 └─13.5─┘	4.1
	「校内暴力」が起きるのは、先生が生徒の悩みを一緒に考えてあげないからだ	26.8 └─65.2─┘	38.4	23.2	9.1 └─11.6─┘	2.5
	「校内暴力」が起きるのは、先生が自分の指導に自信をもっていないからだ	14.8 └─45.5─┘	30.7	35.0	14.8 └─19.5─┘	4.7
	「校内暴力」が起きるのは、先生がわかりやすい授業をしないからだ	10.4 └─27.3─┘	16.9	35.6	25.5 └─37.1─┘	11.6
家庭	「校内暴力」が起きるのは、その生徒の家庭のしつけがしっかりしていないから	15.9 └─47.8─┘	31.9	26.8	16.8 └─25.4─┘	8.6
本人	「校内暴力」が起きるのは、起こす生徒自身に原因がある。	14.0 └─46.2─┘	32.2	26.8	17.5 └─27.0─┘	9.5
友人	「校内暴力」が起きるのは、起こす生徒のつきあっている友だちが悪いからだ	10.6 └─38.4─┘	27.8	29.3	20.2 └─32.3─┘	12.1

らは今日ほど頻繁でもなかったし、もとより刑事事件とされることも少なかった。

さて、校内暴力が取り上げられるとき、決まってその責任はどこにあるのか、が問題にされる。つまり、原因は教師にあるのか、それとも家庭か、あるいは生徒の交友関係かというように。

先般、朝日新聞社の行った成人を対象とした世論調査によると、校内暴力の原因として「しつけなどの家庭環境」をあげる者が52%と半数を越える。そして「生徒個人」、「教師の姿勢」をあげる者はともに8%となっている。かなりの者が校内暴力の責任は、家庭にあるという意見を持つらしい。

それでは、生徒自身はどうみているのだろうか。これは自分の学校でということだけでなく、『最近、中学校の「校内暴力」について、次

のような意見を述べる人があります。あなたはそのについてどう思いますか』という意見調査の形をとって調べた。

結果は表10に掲げてある。全体に校内暴力の原因は、家庭のしつけや生徒自身、それにつきあっている仲間より、教師にあるとみている。原因を「家庭のしつけ」に求める者は、「まあ」も含めて47.8%でほぼ半数。「生徒自身」は46.2%、そして「つきあっている仲間」は38.4%と4割ほどである。

他方、原因を教師の「ひいき」や「できる生徒中心の授業」、それに「悩みの相談にのらない」ことに求める者は、それぞれ73.4%、69.4%、65.2%と多数を占める。また、興味深いことに教師の態度すべてが原因とはみない。例えば、「先生がわかりやすい授業をしない」ことに原因を求める者は、27.3%と少

(表11) 校内暴力原因の順位(学年別)

学年 順位	1 年	2 年	3 年
1	ひいき	ひいき	ひいき
2	できる生徒中心の授業	できる生徒中心の授業	できる生徒中心の授業
3	悩みの相談にのらない	つきあう仲間	つきあう仲間
4	本人自身	家庭のしつけ	家庭のしつけ
5	家庭のしつけ	本人自身	本人自身
6	つきあう仲間	悩みの相談にのらない	悩みの相談にのらない
7	自信のない指導	自信のない指導	自信のない指導
8	わからない授業	わからない授業	わからない授業



なく、逆に原因とならない者のほうが37.1%と多くなる。

こうして生徒から見ると、校内暴力の責任は教師にあると映る。しかし、それは教師がまずい授業をするからでなく、生徒を公平にあつかったり親身になったりしてくれないからだという。

生徒のこうした責任論を目の前にして、学校の中に人間として尊敬でき親身になる人間味のある教師が少ないという彼らの評価を考えると、校内暴力の根は深いように思えてくる。

ところで、校内暴力の原因は学年によって違いはないであろうか。表11は、原因の順位を学年別に並べてある。この表から大きく二つのことが指摘できる。一つは学年を問わず教師の「ひいき」や「できる生徒中心の授業」

が上位にあり、「自信のない指導」や「わからない授業」は下位にあること。

もう一つは、2年、3年と学年が進むにつれて「家庭のしつけ」や「つきあう仲間」に原因を求める傾向が強くなることが指摘できる。校内暴力の原因を教師の生徒を扱う不公平さに求める声は、学年によっても変わらない。ところが、学年が進むにつれて教師や本人よりも、家庭やつきあう友人に原因を求める声が大きくなっていく。

大人は多くの者が、校内暴力の責任は家庭のしつけにあると考えていたが、生徒も成長するにしたがいそのような意見に傾く兆しをみせる。これは、責任の一端は教師以外にもあるという考え方の芽生えであろう。だからといって、生徒が教師の責任を軽くみているのではないことはいままでもない。